これまで、世の中で、優れた仕事を残された方々の多くは、
その人生において、「生死」を体験し、極限の世界を見てきた。
そして、その世界から戻ってきて、深い気づきを得ている。

一度は、失うことを覚悟した、この命。
しかし、再び、その命を、与えられた。
そうであるならば、
自分のこの命は、自分のものではない。
自分のこの人生は、自分のものではない。
だから、この命と人生を、大切な何かに使わなければならない。

では、この「命」を、何に「使」うか。
そこから「使命感」が生まれてきます。

そして、そのような深い「使命感」を抱き、その後の人生を歩んだ方々が、
たしかに、素晴らしい仕事を成し遂げています。

もちろん、そういう極限の体験を持たずとも、
素晴らしい仕事を残される方々は、いる。
しかし、もし我々が、社員や部下の人生を預かる経営の道を歩むのならば、
たとえ体験せずとも、一度は、その極限の世界を見つめてみるべきでしょう。
極限の世界において、人間は、どのような姿を現ずるのか。
そのぎりぎりの姿というものを、一度、正面から見つめてみるべきでしょう。

しばらく前に、私は、『若きサムライたちへ』という本を上梓しました。
あの本は、学生の方々や若い方々に向けて書いたものですが、
最後の「おわりに」のところに、大切な言葉を書きました。

人は、かならず死ぬ。

その言葉を、二度、書きました。
なぜなら、先ほどから語っている「死生観」の話は、
実は、「投獄」「戦争」「大病」といった特殊な話ではないからです。

皆さんも、かならず死にます。

例外はありません。
だから、「死生観」というものは、決して特殊な話ではない。
それは、「学徒出陣」の人たちだけの話ではない。

たしかに、あの方々は若くして亡くなった。出陣の一年後に亡くなった。

しかし、我々の多くも、五〇年後には死んでいる。

では、この一年と五〇年、違いがあるのでしょうか。

違いはない。
だから、「生死」の体験や「死生観」ということは、
特殊な極限状況に置かれた人々の問題ではない。
それは、人間として生まれた者が、
誰しも、かならず直面する問題なのです。

だからこそ、我々は、
「死」ということについての「思想」を持たなければならない。
「いかに死ぬか」ということを、本気で考えなければならない。

それは、本当は、生まれた瞬間から考えなければならない話なのです。
なぜなら、昨日生まれたばかりの赤子でも、かならず死ぬからです。

だから、物心がついたときから
生とは何か。死とは何か。
いかに生きるか。いかに死ぬか。
そのことを本気で学び、考え、覚悟を定めていかなければならないのです。

もちろん、そういう重苦しいことを考えないでも、
いまの時代は生きていけます。
そうしたことを考えないようにして、日々を面白く、楽しく生きていく。
そして、突然、病気になったり、事故にあったら、そのとき考えよう。
そういう生き方でも、やっていけます。

しかし、もし我々が、真に充実した生き方を求めるならば、
胸に刻むべきです。

メメント・モリ。（死を想え）

その言葉を胸に刻むべきでしょう。

先ほど、『若きサムライたちへ』という本において、
「人は、かならず死ぬ」と書いたと述べました。
それを聴いて、皆さんは、思われるかもしれません。

これから大きな夢が広がる若い方々に、
ずいぶん厳しい言い方ではないですか。

そう思われるかもしれません。
しかし、そうではない。
これから大学を卒業して、実社会に出られる若い方々が、
「自分はいずれ死ぬ」と覚悟を定め、自身の「思想」を深めていくならば、
この方々の、これから何十年かの人生は、素晴らしい人生になる。
かならず、実り多き人生になる。

だから、私は心を込めて、若い方々に語りたいのです。
人間は誰しも、人生の最期の場面に向かって、歩んでいる。
そうであるならば、

その最期の場面から人生を見つめて、歩まれるべきでしょう。
そして、その「気づき」は、早いほうがいい。
もちろん、人生において、遅きに失するということはない。
しかし、やはり、早いほうがいい。

若き日に「死生観」を身につける。
「人は、かならず死ぬ」との覚悟を定め、
「いかに死ぬか」を求め、「思想」を深めていく。

その歩みを始めるのは、
早いほうがいいのです。